

今月の子ども

園児の遠足



中園孝信（撮影・文）

カラフルな服装をしてカラフルな雨傘を持った子どもたちの遠足です。大きなリュックにはお弁当、お菓子、飲み物が入っているのでしょうか。大人の黒っぽい服装とは違います。楽しそうな行列です。先生を先頭に進んでいます。いちばんうしろにも先生がついています。上野動物園のパンダを見てきたのか、国立科学博物館で恐竜を見てきたのか、これからどこへ行くのか分かりません。軽やかな足取りから想像するときっとみんなといっしょで楽しいのだらうと思います。

今月の詩

ゆあさとしお（選・文）

子どもはいつも冒険者だ。彼の前に、世界は謎に充ちている。

金子みすゞの「ふしぎ」は、子どもの眼で世界を見つめた詩だ。大人にとってはあたりまえのことに、みすゞは不思議を発見する。「私は不思議でたまらない、誰にきいても笑つてて、あたりまえだ、といふことが。」不思議であることとあたりまえであることの落差。

ヴィム・ヴェンダースの名作『ベルリン天使の詩』という映画作品。冒頭近くのシーンで「子供は子供だった頃」という詩が朗読される。「子供は子供だった頃/いつも不思議だった/なぜ 僕は僕で 君でない？/なぜ 僕はここにいて/そこにはいない？/時の始まりは いつ？/宇宙の果てはどこ？/この世で生きるのは/ただの夢？」

哲学者とは、自分の中に子どもの眼を宿している人のことだ。この世界が不思議に満ちていることを発見し、驚きつづけること、そこにこそ哲学が成立する。「ユリイカ！（われ発見せり！）」、驚きの中に世界は更新されて、そこにある。

ふしぎ

金子みすゞ

わたしはふしぎでたまらない、
黒い雲からふる雨が、
銀にひかっていることが。

わたしはふしぎでたまらない、
青いくわの葉食べている、
かいこが白くなることが。

わたしはふしぎでたまらない、
たれもいじらぬ夕顔が、
ひとりではらりと開くのが。

わたしはふしぎでたまらない、
たれにきいてもわらってて、
あたりまえだ、ということが。

I 放課後児童健全育成事業の課題 —大学における放課後児童支援員の養成を目指して

中田周作（中国学園大学）

こんにちは。岡山県の中国学園大学子ども学部で社会学や教育原理、教育社会学、学童保育論、学童保育実習等を担当しております中田と申します。先の自己紹介でも、少し紹介させていただきましたが、私は、現在、学童保育について研究をしています。学童保育に関する先行研究は、必ずしも多くはなく、制度的にも不安定なまま、いわば放置されてきたような状況にありました。

○学童保育へ通う子の急増

ところが平成 10 年の法制化（児童福祉法と当時の社会福祉事業法、今の社会福祉法に放課後児童健全育成事業として明記されたことを指しています）以降、急拡大を続けています。この間、学童保育に通う子どもの数は 35 万人から 100 万人と、約 3 倍になりました。放課後児童健全育成事業が対象とする子どもも、これまで小学校 3 年生まででしたが、児童福祉法の改正により今は、6 年生まで受入の対象となっています。待機児童も、正確に計算することはその性質上、難しいですが保育所よりも多いとも推測されています。政策もこうした現状を把握しており、今後もあと 2 割くらい受け入れる児童数を増やしていくことになっています。

こうなると学童保育の先生の数も、たくさん必要となります。厚生労働省の調べでは、学童保育の先生は約 12 万人いらっしゃるそうです。参考までに学校基本調査を見ますと、幼稚園先生は認定子ども園を除いた幼稚園に約 10 万人いらっしゃいます。学童保育の先生たちの養成システムに目を向けると、これまで特に資格は必要なかったのですが、平成 27 年度から平成 31 年度までに、現職者を対象として放課後児童支援員認定資格研修の受講を求められています。この認定資格研修は、24 時間 16 科目で構成されており、教員の初任者研修 300 時間と比較すると少なく思われます。しかし、大げさにいえば、日本の歴史上初めて、学童保育の先生に求められる知識を、国の制度として系統立てられたカリキュラムが明確になったという点では、極めて意義の深い研修であるといえます。

こうした状況からすると、大学等においても、学童保育の先生の養成を始めなければならない時期が来ているのではないかと思います。それならば、放課後児童支援員の資格を大学等で取得できるようにすれば良いのではないかと考えることができますが、現在の制度では、保育士資格や教員免許等もっているなど、いくつかの提示されている条件のうちの一つを満たさないと放課後児童支援員認定資格研修を受講することができません。そのため実質的に大学生が放課後児童支援員資格を取得することはできないのです。とはいうものの、こうした問題点は、制度を修正すれば乗り越えられる課題です。

○指導員の資格取得に向けて

私が勤務しております中国学園大学子ども学部では、特定非営利活動法人日本放課後児童指導員協会が認定する学生向けの放課後児童指導員資格を出しています。放課後児童指導員の資格を学生に向けて発行している大学等はまだまだ少ないですが、放課後児童指導員の養成課程を大学が設置することで、学生たちの就職先としても、学生たち自身が注目をし始めています。学童保育の先生方の待遇は必ずしも良くありませんが、それでも毎年のように処遇の改善が見られており、遊びと生活を通して子どもと関わりたい仕事に就きたい学生たちにとっては、魅力ある就職先となりつつあります。子ども支援学会の会員の先生方の大学等でも、是非、導入を検討されてみてはいかがでしょうか。

さて、学童保育の先生の養成を大学等で行うにあたって、現在、もっとも不足している知見のひとつ

は間違いなく学童保育実習を、どのようにするかということだと思います。といいますのは、私も現在、学童保育実習を担当していますが、なかなか苦勞しています。理由は簡単です。学童保育実習については、先行研究が皆無に等しいからです。そのため、教育実習や保育実習、社会福祉実習等の近接領域の実習を参考に、授業内容を作りあげているところです。しかしながら、どうも、学童保育の独自性が上手く反映できていないと感じています。といいますのも、教師や保育士の場合、ひとりの先生が目の前にいる子どもたち全員を集めて、授業や保育をすることが一般的な形態です。しかし、学童保育の場合、活動している空間に複数の先生と複数の子どもたちがいて、先生たちは連携しながら、子どもたちに対応していきます。学級等とは異なり活動中も、子どものグループのメンバーは流動的です。

○保育士や教員とは異なるスキルも

学童保育では、こうした場面の連続で構成されているので、保育士や教員とは異なるスキルが求められています。当然、こうした点を踏まえて、学童保育実習を行う必要があることは、机上の議論では容易に理解できます。しかしながら、そうしたスキルを獲得するための学童保育実習をどのように行うのかということについては、まだまだ模索が続いています。もちろん、研究者だけでできることではなく、実習を受け入れ実習指導を現場で担う先生方とも一緒に学童保育実習のあり方を作り上げていく必要があります。そのため、学童保育の先生方と定期的に研究会を開催しており、学童保育独自の実習のあり方を検討しています。いつか、子ども支援学会で、こうした成果について発表することができればいいなと思っています。(了)

II 子どものころ：Q&A

深谷和子

ネコに石をぶつけるお父さんをやめさせたい (小5女子)

Q

うちのおとうさんは、だれにもやさしくて、いいおとうさんなのに、ただ、ネコがきらいなのです。このあいだから、うちの庭に白くてかわいいネコがくるようになりました。いつもおなじ場所で、ただすわってこちらを見ているだけなのに、日ようびや、おとうさんがいる日に、おとうさんはそのネコを見つけると、シッシッと、おこり声を出します。それでもネコが行かないと、石をさがしてきて、ぶっつけるのです。あたらないけれど。どうしたらやめさせられますか。(みずほ)

A

白くて、かわいくて、悪(わる)いことをしないネコなら、お友だちになりたいのにね。どうしてお父さんは、そんなにネコが嫌(きら)いなのかな。嫌いというより、こわがっているのかもしれない。

心理学(しんりがく)では、人が何かわからないことをしたら、その奥(おく)に何か原因(げんいん)があるのだと考えます。それがわかると、「許(ゆる)せない!」と腹の立つ気持ちも、じぶんの中で、少し静かになったりもするのです。

お父さんは、もしかしたら子どもの頃に、ネコにひどい目にあったことがあるのかもしれない。だっこしようとしたら爪でひっかかれたとか、服におしっこをかけられたとか、大事(だいじ)な金魚をすくって食べちゃったとか。たった1度なのに、それが心にやきついているのかもしれない。しばらくしたら、ふつうは忘れてしまうのに、なぜかそれが心からはなれない。心理学ではそれを、「トラウマ」といっています。お父さんは、ネコにひどい目にあわされて、それが今も「トラウマ」になっているのか

もしれない。

そういえば、ネコはどこか不気味（ぶきみ）な目をしているよね。昔から「化（ば）け犬」の話は聞かないけれど、「化けネコ」の話は、全国（ぜんこく）どこにもあるから。犬はそうでもないけれど、ネコはこちらを向いてじっとにらむでしょ。お父さんはおとなになっても、子どもの時の「トラウマ」で、ネコをみると、からだがかたまってしまうのかもしれない。かわいそうにね。

でも、あなたは「ネコに石をぶつけるのは、かわいそうだから、やめて」といったことがあるのかな。あなたのその気持ちを、お父さんは知らないんじゃないのかな。

けれど、それはあなたがいうよりも、お母さんからお父さんにいってもらったほうがいいかもしれない。お父さんに説明（せつめい）するのは、お母さんのほうが上手（じょうず）だと思うの。

そうしたら、お父さんも「シッ、シッ」ぐらいは、まだ、いうかもしれないけれど、石をぶつけることは、ガマンするようになると思うけど。

イベント情報

I ワークショップ・「レジリエンス（立ち直り力）を考える」

「失敗にめげない子」（児童心理・2017年11月号、916円）をテキストに

- 1) 日時：2018年7月14日（土）午後2時～4時
- 2) 場所：東京駅 ルノアール会議室 5階2号室
八重洲北口下車4分（03-3510-7889、八重洲北口を出て、信号を渡った先に見える「日興証券ビル」に添って曲がる。左側の1Fにもルノアールがあるが、その少し先の右側の1階の貸会議室で）
- 3) 定員：25名（事前の申し込みが必要。学会員以外の同伴も歓迎）
- 4) 参加費：1千円（「失敗にめげない子」914円を事前にご自宅または職場宛てに金子書房から郵送しますので、当日ご持参ください。（雑誌代80%と郵送費を含む）
- 5) 内容と講師：「レジリエンスについての基礎的な理解」（深谷和子東学大名誉教授・児童臨床心理学専攻）による20分程度の解説の後、読后感想を2名（参加者の中からあらかじめお願いしておきます）各10分程度お話しただいて、残る1時間小で、話し合いを持つ予定。
- 6) 参加申し込み MLでの返信は出来ない仕組みになっておりますので、深谷昌志の個人メール mss.fukaya@nifty.com にお願ひ致します。また、雑誌の送付先の住所と郵便番号をお知らせください。費用1千円は当日に。
なお本ワークショップの会場費の1万2千円は学会からの支出。（2時間で割引制度を利用。32人サイズの会議室を予約）学会員が講師の場合、謝金はありません。飲み物等は自販機等で各自お持ち下さい。
- 7) 「レジリエンス」についてのコメント 講師：深谷和子
この語は欧米では古くから使われていて、研究も盛んですが、日本ではまだ一般には使われていません。しかし日本でも10数年前から、研究者たちが関心を寄せ始め、論文発表や測定尺度の開発などが行われています。人は（子ども大人も）人生で、何度か挫折を体験しますが、それから「立ち直る」力を十分に持っていれば、挫折や失敗を恐れる必要がなくなり

ます。そう考えると「レジリエンス」は、人が持つ「何よりの財産」とも言えるでしょう。では、レジリエンスを高める方法はあるのでしょうか。

8) 今後に向けて

本学会では、今後も3月と9月に外部講師を招いて、学会主催のフォーラム（5時間程度）と7月と12月にワークショップ（2時間程度）を持つ予定です。またご参加が難しい方のために、イベント後に、内容の概略を掲載した学会ニューズレター「風の便り」の臨時増刊号を刊行する予定です。

II 2018年「日本子ども支援学会」秋季フォーラム

2018年9月15日（土） 午後1時～5時

於：[東京学芸大学](#) S204 教室

総合司会：清 文枝（テレビ朝日アスク）

趣旨説明：深谷昌志（東京成徳大学名誉教授）

第1部 パネル討議 「子ども支援の隘路となるもの」

司会：瀧口 優（白梅短期大学教授）

1. 北区わくわく広場の活動から 安田勝彦（北区わくわく広場代表）

2. 天理市の子ども支援活動から 市本貴志（天理市議会副議長・地域支援センター副理事長）

第2部 ワークショップ「アロマザリングの中での養育を考える」

司会：深谷昌志（東京成徳大学名誉教授）

1. 基調提案：アロマザリングとは何か 根ヶ山光一（早稲田大学教授）

2. パネル討議：パネリスト ①根ヶ山光一（早稲田大学教授）

②日高真智子（千葉県里親会副会長）

③青葉紘宇（東京養育里親会理事長）

指定討論者 中山哲志（東京成徳大学教授）

会員談話室

新緑が美しい季節となりました。ここ軽井沢では多くの植林されたカラマツがあり、薄緑色の葉には春の息吹が満ち溢れています。小さなコロコロとした若い球果がかわいらしく、思わずカメラを向けました。カラマツは春の新緑から秋の黄葉まで、景色を彩る美しい樹です。

（細江久美子：在軽井沢）



自己紹介（到着順）

○栗本 颯（電話相談インストラクター）

大学院2年生の頃から現在にかけて、全国の小学生・中学生・高校生・保護者・教員を対象に電話教育相談の仕事をし、時には虐待通告の案件にも携わってまいりました。また、最近では心理学のコラムなどを

作成し、世の中に心理学の魅力や活用方法をご紹介します。学校心理士や応用心理士、心理学検定特1級などの資格を持ち、1人でも多くの方の支えになれるように活動しています。将来的には、「大学等で心理学の講師」を行っていただくと考えています。心理学に興味を持った学生に、楽しみながら魅力のある心理学を発信していければと思います。

大学生の頃から、とりわけ「いじめ」をテーマに研究を続けており、もうすぐで10年になろうとしています。研究をすればするほど発見することも多くありますが、その逆にわからなくなることも多くあります。私自身がいじめが原因で不登校になった経験を大いに活かし、今後のいじめ対策に貢献ができればと思います。現在は、学会の諸先輩から、心理学やカウンセリングについてご教授をいただき、日々研鑽に努めております。まだまだ経験が浅いため、様々な方たちと関わり、刺激を受けて発展をしていければと思っておりますので、お気軽にご連絡等をいただけたらと思います。どうぞ、よろしく願いいたします。

メールアドレス：pyon_pyon_v_0917@yahoo.co.jp 電話番号：080-5536-8379

○細江久美子（こどもサポーター、軽井沢観光協会広報委員

中軽井沢駅前でカレー＆コーヒーの店「ア・ラ・ガール」を家族で経営、

東京都足立区生まれ。千葉県柏市で育ちましたが、両親の仕事の都合で長野県軽井沢町に移住し37年が経ちました。現在は主人と長男（次男は東京で就職）との3人暮らし、中軽井沢の駅前にてカレー＆コーヒーのお店「ア・ラ・ガール」を切り盛りしています。また軽井沢の周遊を意味するクラシックカーのイベント、軽井沢若葉まつり「ジーロ・デ・軽井沢」を主催、今年で17回目を迎えます。その他、軽井沢町商工会女性部と軽井沢観光協会に所属しており、観光協会では広報委員会としても活動しております。

愛読書は小池真理子さん。彼女と親しくさせていただくようになり読むようになりましたが、おすすめは軽井沢が舞台の「冬の伽藍」。軽井沢に関する描写が特にすばらしいです。また最近パンを焼くことにはまっていて、食パンやお惣菜パンなど日々練習中です。ブログを書くようになってからは写真を撮ることも好きになり、道端の花や、季節の移ろい、自然など気ままに撮っています。「風の便り」などで皆さまの目に触れる機会もありますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

○大山光子（こども支援士・一般社団法人あだち子ども支援ネット代表理事）

浅草の隅田川の川面に映る朝日、夕日をみながら活気と山谷の変遷を感じ社会福祉の単科大学を家族に反対されながらも通い続け、そのような大学生活も、大学紛争で・・・中退。

足立区での子育てと町会地域活動・健全育成活動、区の青少年委員・民生児童委員を経て今があります。この4月に一般社団法人あだち子ども支援ネットを立ち上げ、代表理事になりました。学校外での地域の子ども達との交流活動も30年になった今、肩書の委員活動を下ろしていただいた最後の寄り添い活動と意識しています。学校・地域・家庭の三面の現状から見える子ども達的心情や育ちの環境のバランスを、年々不可思議に感じています。頑張ってもがんばっても思うようにはならない人の人生体験の中で「支援」のありがたさに考えさせられてもいます。

テレビの「科捜研」「相棒」を見ながら地域の子どもの乱入をさけてPC打ち込み(企画書・報告書・助成応募)に明け暮れ、地域健全育成活動や学校協議会に関わることで『子ども達の成育環境の改善発達の発言者になれ』と子ども達から委ねられ、そのような言葉に応えるには、大人社会の意識改革からと強く思う昨今です。どうぞ、ご指導をよろしくお願い致します。

○齋藤恵子（貞静学園短期大学准教授）

文京区にある短期大学で保育関係の教科を担当しております齋藤恵子と申します。保育所入所家庭や乳幼児の人間関係形成に関心があり、主な研究テーマとしています。

私は、保育者養成校を卒業後、公立保育園保育士として勤務していました。長女の出産を機に退職し、

その後、自宅を開放した幼児教室を主宰、認定子ども園の施設長、専門学校の教員を経て現在に至っています。

振り返ると、いろいろなことを経験してきたと思います。その経験が今の自分を育ててくれ、支えにもなっています。勿論、楽しさの中にも大変なこともありました。そこには、いつも多くの人の教えや支えがありました。人を育てるということは自分がしてもらったことを次の人に繋いでいくことなのかもしれない、教員となり、そんな思いで学生と関わるようになりました。まだまだ、様々な人に助けていただいている私ですが、今回、日本子ども支援学会に入会の機会を頂いたこと感謝し、学びを深め、次に繋いでいけるよう努めて参りたいと思っております。今後とも、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

○熊澤幸子（昭和女子大学名誉教授）

昭和女子大学に42年間勤務し、定年後は東京成徳大学の特任教授として3年勤務しました。非常勤を加えれば、東京成徳大学には10年になります。楽しく大学の教員生活を過ごせたことは、感謝の一言です。

大学を卒業後、すぐに大学院に進学し、栄養学を専攻したので、「栄養生化学」でマウスの動物実験が中心でした。今でいう理系女(リケジョ)で、白衣を着て実験しておりました。しかしその研究は長く続けることが不可能となり、その後は福祉の勉強がしたくて「生涯にわたる食と健康と福祉」に興味を持ち研究を続け、生涯教育の楽しさを味わいました。1つの分野ではなくて、幾つかの分野にわたって勉強してきました。まさに生涯学習です。振り返りますと職場と環境、そして人間関係に恵まれたことです。特に、深谷先生ご夫妻との出会いは有難く印象的でした。以後ご厚意に甘えています。

講義をするのには、その準備に多くの時間を費やしますが、授業は一つの舞台だと思っております。どのような舞台にするか、満足する舞台であったか、毎回毎回の舞台は様々でした。学生との関係も楽しく、私の生きがいでした。

○小川香代子（[みらい保育園](#)長）

東京の多摩北部、埼玉県との境にあります武蔵村山市にあるみらい保育園で園長をしております。一緒に勉強させていただける機会をいただき大変うれしく思っております。どうぞよろしくお願い致します。

この4月で園長としての仕事も10年の節目を迎えました。10年ひと昔と言いますが、この間、保育園をはじめとした保育業界の変化は著しく、ことに平成27年の「子ども子育て支援法」以降、毎年子ども一人に対する委託費の単価が上昇し、さながら20年遅れてきたバブルのような状況になっています。とはいえ、待機児解消策として、幼稚園や認定子ども園で低年齢児を受け入れるようになったことや、国の規制緩和で施設の数が増えていることもあって、職員不足は深刻で、雇用条件をよくしても人が集まらず、せっかく増やした定員どおりに子どもを受け入れられない園も多いと聞きます。果たして本当に待機児解消になっているのかどうか・・・。

現場にいとこのような制度の矛盾をよく感じます。長時間子どもを預けられる施設を増やすことより、お母さんがゆったりと家庭で子育てできる時間を増やしてあげるような制度ができないものか、それこそ少子化の一番の対策になるのではとも。そんなことを日々考えつつ、孫のような園児の笑顔に癒される毎日です。

句会むさしの

○麦秋や背のやつれの五条袈裟

安田勝彦

麦秋は夏の季語です。麦が黄色く熟し刈り入れ間際の5月の下旬の頃を言います。夏に向かう老僧の背（せなと読みます）のやつれに五条の袈裟をまとう姿を読みました。

○母の逝く黄泉の国なり花御膳

森永徳一

季語は「花御膳」です。いつも、桜の季節に妻の実家で、妻の母と兄と私たち夫婦が桜の名所の堤さくら（深谷市）に、毎年見物と家族の桜の小宴をしていました。今年は、母の急逝で同じ場所で、小宴がもう出来なくなってしまったという母を想う句です。四季の移ろいと人の往来、生き死にの「儚さ」を俳句にしました。きっと、急死した母は、毎年桜の季節が来ると『黄泉の国』（天国・彼岸）で、親しき親戚・知人たちと『花見の御膳』を囲んでいるのでしょう。四季の草花を見ると、いつも「人の出会い」と「別れ」を思い、俳句づくりをしています。私にとっての「俳句の教科書」は「四季」と「人の出会いと別れ」です。会員の皆様も俳句を作り、詠み・語り合いましょ。

○笹百合に出会う山路や老ふたり

上島 博

妻と二人、たまには運動せねばと、二上山に登ることにする。若いころ日本アルプスを縦走した片影は、微塵もない。体の声を聞きながら、ゆっくりゆっくり。ヘビイチゴ、ヤマアジサイ、野ウサギ……。ゆっくり歩くとこんなに豊かな山路だったのだ。道を曲がった先に笹百合の蕾を見つけた。群れず媚びず怯まずに在る淡桜色に見とれながら、来て良かったねと語り合った。

むさしの川柳

石川えみ壺

○飛んできて落下地点は風まかせ

○鬼は友 豆撒き止めて鯛焼く

○五十年守秘義務の箱積み上がる

今月の本棚

鳥飼久美子「危うし！小学校英語」（文藝春秋、文春新書 2006年 788円）

瀧口 優



著者は鳥飼玖美子氏（当時立教大学教授）で、今から10年以上も前のものである。2011年から小学校に英語活動が入り、来年からは教科としての英語が小学校5年生から入るということで、既成事実はどんどん進んでいるが、現実の問題は放置されたままである。

鳥飼氏は1970年代に同時通訳として一世を風靡し、英語に関しては右に出るものはいないと思われているが、こと日本の小学校英語教育については、その進め方に反対を唱えている。「危うし！小学校英語」は、小学校に英語が導入されようとしている時期の警鐘として書かれたものであるが、その内容については多くのことが今でも指摘された通りである。本の内容に関連させて私見を述べたい。

まず、何のための小学校英語かということであるが、この間の導入の経緯をみると産業界からの強い後押しがあり、産業界が使える英語を目標としていることである。子どもの発達や英語力の育成を掲げているが、内容的には「遊び」に類するものである。これで英語ができるようになるというのは幻想であり、むしろ落ちこぼれていく子どもを英語が作ってしまうということである。

この本でも一部あげているが、教育条件の整備がまったくできていないということが次の課題である。欧米では20人台の学級が一般的であるのに、40人学級をそのままにしていることである。ことばの授業、とりわけコミュニケーションを重視するのであれば、多くても20人のクラスで授業が出来る条件づくりが必要である。またネイティブ・スピーカー（外国人講師）の採用も国が責任をもって確保するのではなく自治体任せになっているということも大きな問題である。

更に、小学校3年から英語活動がはじまり、子どもの振り分けが行われるということである。経済的に恵まれている子どもは学校外において塾や予備校、家庭教師等のサポートで英語を学び、ゆとりがない家庭では分からない英語の授業の中で落ちこぼれていく。10%ができればいいというのが財界の思惑でもある。新しい中学校の指導要領では、それを前提として学ぶべき単語数が1.5倍に増やされ、高校では英検などの資格試験が大学入試に義務化される。問題なのは小学校英語だけではない（了）。

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・（ニューズレター委員会）

「風の便り」6月号をお届けいたします。皆さまのご愛読とご感想など、ご自由なご投稿をお待ちしております。

お互いの「顔が見える学会」を標榜して発足した「子ども支援学会」ですが、ウェブ上で会員をつなぐ大事なツールの一つは、季刊の「風の便り」（3で割れる月の初旬発行）ではないでしょうか。アカデミズムも失わず、でも皆がエンジョイできるステージを創ればと考えております。とりわけ「巻頭」の「子ども支援活動報告」（都合で今月はお休み）の欄に、会員の方々から、大小の実践記録をお寄せいただきたいと願っております。

投稿先：kazukofukaya@nifty.com

<編集委員>

深谷和子・中園孝信・湯浅俊夫・上島博・大高志芳・三枝恵子・清(池田)文枝・土田雄一・吉野真弓
(以上)

<風の便り 第2号目次>

今月の子ども、今月の詩	中園孝信・ゆあさとしお
子ども研究ノート	
I 放課後児童健全育成事業の課題	中田周作
II 子どものころ：Q&A	深谷和子
イベント情報	
会員談話室	(撮影) 細江久美子
会員自己紹介	栗本 颯、細江久美子、大山光子 齋籐恵子、熊澤幸子、小川香代子
句会 むさしの	安田勝彦・森永徳一・上島博
むさしの川柳	石川恵美子（石川えみ壺）
今月の本棚	瀧口 優
編集後記	